

# しっ くい と た た き 漆 喰 と 三 和 土

株式会社 バルクワールド 川 添 洋

奈良・京都の寺院を朝方訪ねると塀の美しさと共にその空間にただよう凜とした清冽な雰囲気、心が洗われるような体験をした人は多いと思います。

下写真は AD607 年に創られたとされる法隆寺で、近年、世界遺産に登録されました。

正面から入っていくと左右に“三和土”の塀が続き、遠くに見える五重塔及び金堂が自ずと眼に飛び込んできますが、それらの建物の漆喰の白壁が瓦や柱の暗色にマッチして落ち着いた雰囲気を作っています。



この漆喰と三和土について日本石灰協会の『石灰は環境にやさしい地球を守るアルカリ資源です』は、漆喰を『消石灰に麻ササやのり（銀杏藻）などを混ぜた塗装材』と記し、三和土については『石灰と土（真砂土や粘土）及びにがりから成る塗装材』とあります。漆喰は土壁の防水性を高め、調湿機能があり、不燃素材なので上塗用材として古くから使われてきました。尚、ササは亀裂防止のつなぎとして用いられ麻の他に藁や紙が使われ、又、のりは海藻の角又等を煮詰め保水性を良くし接着効果／施工性を高める用途で用いられました。そのササとのりをよくこねて混ぜさせた後に消石灰を加えて、漆喰は作られます。

漆喰は、寺院や城壁の白壁に代表される漆喰壁がなじみの深いものですが、この漆喰を“鏝絵”として芸術にまで高めた人として入江長八と云う人が江戸末期から明治初期に活躍し、その偉業をたたえた『長八美術館』が静岡県賀茂郡松崎町にあります。右上写真は松崎町の岩科学校に残る氏の作品です。

漆喰は二酸化炭素を吸収しながらすぐに硬化しますから、このような躍動感ある龍を短時間で細密に描き上げる氏の技量に人々は称賛を惜しませんでした。

氏はこの漆喰に色粉を加えた色漆喰の優れた作品を幾多残しています。この色粉を漆喰にのせる接着には膠（にかわ）が使用され、赤の着色には朱が用いられました。



岩科学校 & 長八美術館：松崎町

ところで、この“鏝絵”と同じ漆喰装飾が高松塚古墳や法隆寺金堂の壁画で描かれていると云うと驚かれるかもしれません。Wikipedia『こて絵』には、『具体的には小さなこてを焼いて、それによって紙または板を焦がして描く。焼き絵、鉄筆ともいう。木で心柱を作り、その外側に荒土や白土にすき糊を混ぜた材料で作るのがこて絵の源流。漆喰は、貝殻と木炭を焼いた灰で作る。』と古代の漆喰の作り方及びその装飾法について述べています。又、地震に続く火山の噴火で消滅（AD62年）したポンペイに残されたフレスコ画は漆喰に描かれた壁画です。以上からも、漆喰／三和土の材料である石灰は、旧くから人々の生活に有用な原材料で在った事が解ります。